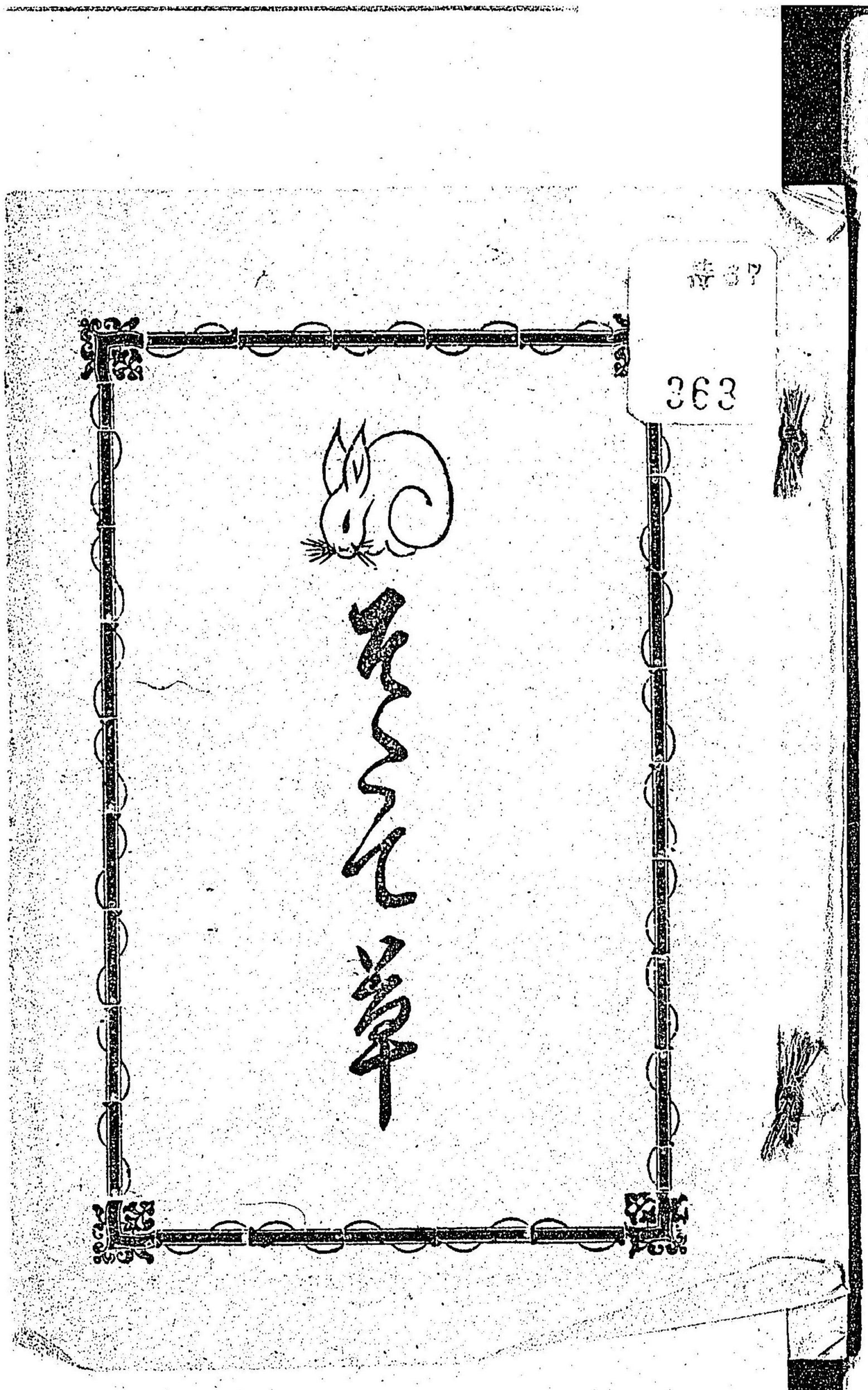


064609−000−1

特67−363

兎そだて草

田村 貢／編

M25

CCD−0020

凡例

一此書ハ曩ニ中村某氏の著作に羅リーを今回誤謬を訂正して世の兎飼育者の便に供するものあり

一末欄に至りて諸肉性分の比較を掲け是亦飼育者の參考に備ふるあり

特67
363

緒言

方今肉食盛ニ行ハレ需用之れか爲め大に增加ス供給間ニ合ハ
けり中ふる牛肉の如キ年一年に減耗するニ至リ此に於て
か牧場を設け牛豚を飼養ス或ハ家禽場を創立して需用ニ應せ
んとスるあり牛禽家禽固より可なりと雖とも彼の兎の如キ
飼養容易にして生長速かなり其味美にして滋養多く且つ毛皮
に諸種の裝飾ニ供スるを得らるゝあり然りとも家兎を養ふも
の未た多からさるハ常に遺憾とする處あり故に茲に佛國種を
始め諸州の家兎を飼養し益々蕃殖ニ以て毎戸飼養するの
家雞の如くならしめんと欲すること久し時機の然らしむる處ろ

各地に同意の士續々輩出して其飼養法を苦しむもの往々之あり故に此飼養法を編纂して世に公ふすること爾り

明治廿五年十月

編者識

兎そたて草

兎の種類及び効用

第一　佛蘭西種　此種ハ佛國有名の牧畜家が肉用を主として改良したるものにして輓近の舶來ハ係る体軀肥大其量壹貫六七百目に達し且蕃殖ふ易くして強健なり其棕色の者最も美味にして白色又ハ白色ふ黑點又ハ棕色點あるものハ亞く黑色のものも亦甚た佳味なりとす其毛皮ハ諸の裝飾ふ供すべく織物に用ゐべ紀者ふして白色種の如きハ最も艶美なり

第二　亞弗利加種　俗に（メリケン）と云ふ　此種ハ佛國種ふ

亞ゝ壹貫目以上ゝ達す

第三　無垢　此種ハ柔軟の長き毛を生ー毛皮と貴けれとも其にくと至て少なし

第四　支那種　俗ゝ(南京種)と云ふ　此種と所謂熟兎なるものにして体少ゝして耳短ー然れとも甚た強健ゝして飼育至て易く且雛兒を育つると巧なれハ換親とするゝ適せ

蕃殖の割合生壽

兎ハ其蕃殖の速なる實ゝ驚くべゝ者にして種類によと差異ありれとも先大概と五ヶ月にーて兒を生ミ一回七頭乃至十六七頭を生み而して一年六回乃至十回分娩五年ゝして止ミ十二年内外生存する者あり今試に蕃殖の類の數を筭すれハ一審の兎一月一日ゝ交尻ー一回七頭つゝ十回分娩の割合を以て一ヶ年の末ゝ至れハ一千七百余に及ふべー但牝牡と六四の割合あり

飼育法

飼育法ゝ二ゝあり一と自家屠殺用の爲めゝ十類頭を育飼ゝ一と榮利の爲めに數百頭乃至數千頭を飼育する者これなり其方法ハ第一圖の如く放牧するを宜ーとす

(三)ハ竹の柵　(ホ)ハ屋根を付たる寢巣

(イ)(ロ)ハ放飼場　(ハ)ハ中仕切

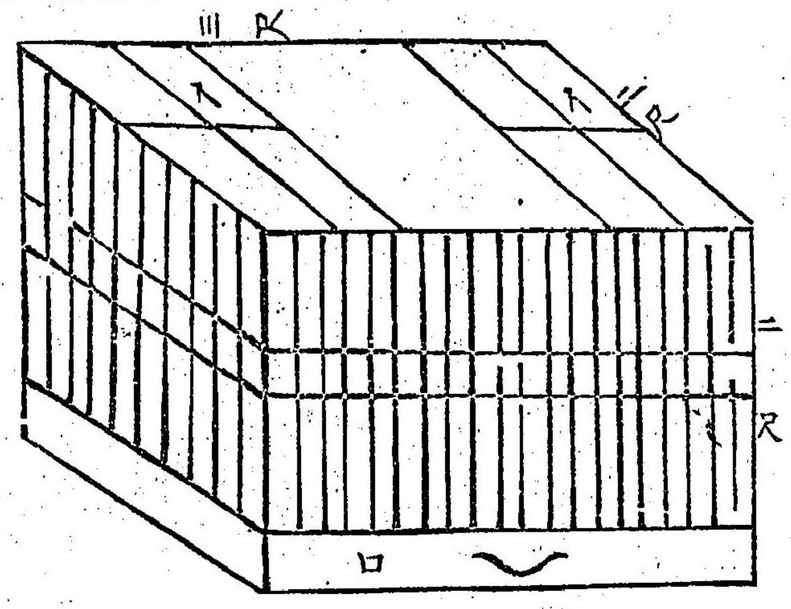
圖の如く數區ゝ劃をるものハ同時に生をたるものを區ゝ放

つを要するを以てあり
(ハ)の中仕切ゐハ戸を
付け(イ)ある放飼場を
掃除するよ當り(ロ)の
方へ移さ(イ)の方を掃
除さ牧草の成長するを
俟て更ふ又(イ)に移す
交互此の如くすべー

第一圖

イ	イ	イ	イ
ホ	ホ	ホ	ホ
ヽホ	ヽホ	ヽホ	ヽホ
ロ	ロ	ロ	ロ

第二圖　但一審を養ふべきものを示す



上部(イ)ゐ明蓋を付け食飼に便さ
下部(ロ)を引出さふす糞を取り又
掃除ふ便す引出の上ゑ細竹よて
簾をあー尿の漏る様ゐすへー裏
面ハ「ハメ」ふす其一部分に戸を
付ー兎出入ふ便さへし但横面ふ
ても前面ふても函据付の便宜を
見計ひ適宜ゐこきを付すべさ

窓明ハ五分以下とさ丸竹を用めべー木ゐてて兎こきを咀み折

るとあり鉄あみならを猶更よろし

飼育函ふて養ふよい常々柔なる野草又を野菜類の切屑等を與へ又時々雪花菜を與ふへし雪花菜を與ふるにハ野菜又を野草の屑を細ふ刻みて水を加へて能くねり與ふきび大ふ喜て食す

放牧をるふも亦前の如きものを與へ牧場にハ「マーシペントクラス」「チモチーグラス」「イタリアンライグラス」「イエルローハクロハー」「アルシアイグロバー」「ホウイトハクロバー」等の如き牧草を下種ふて飼育をべー冬期を根菜類の外山野の青草等なをを以て夏秋の候より粟黍玉蜀黍等の藁を乾ふ貯置をこれを與へ乾艸を二三寸程刻みて温湯を灌き糠を和して與

るを宜とす又大根の葉及根胡蘿蔔の根及葉等も與へ且きびを萌ーて與るハ更に可なり其きびを萌ー法ハきびを莚に包み土中ふ埋むるか又は四斗入の桶ふきび壹斗を入水を注をて浸をふを二晝夜乃至四日此間時々攪抹ふて水を清まふ而ーて后一晝夜水切りて萌せハ芽出るなり其二分程長せふ時これを與ふべー

凡兎を山野ふ生をる植物の葉を大概ふきを食するものふきを也其食せさるものを毒物ふきび決ーてふれを與ふべららす又兎最好んて食する野菜をふのれび芹ほさ葛の葉「ヲーバコ」等ふふく其外馬鈴薯及葉莖大豆の葉甘藷等も喜て食ふ

函飼に於ける敷藁は少くも一週間に一回これを交換し灰又は細土を散布して藁を一二寸に切り其上に敷べし然れば惡臭を其灰及細土に吸取るを以て兎の衛生上に大効あるのみならずこれを肥料に用ひて効驗著大なり

配偶及交尻

牝牡の割合は牡一頭に牝八頭乃至十一二頭とす交尻をなさむるには牝兎の陰門紫色を呈するを俟て唾を塗りて牡兎に接せしむべし忽ち交尻せ其度に三四回にして足きて分娩後交尻せしむるみて分娩より二日を隔て一週間の内に於てすべし若し一週間を過れば情去り更に發情するを俟つに非されば交尻

せしむるを不能に至るあり分娩の後仔を一處に置くは后生みの子弱なるを以て傷室を取るとあり

分娩及飼育の注意

大概三十二日又は三十三四日のものあり而して稀みに其仔を育ふを嫌ひ乳を與へざるものあり此の如きものは他の兎の乳を與ふべし其時みは必ず其親兎の尿を仔の上下の背頭に塗るべし此の如くせざれば乳を與へざるあり又自ら產たる雛仔を咬殺するものあり此乃如きものには槇香（マツコウ）を雛仔の体に散布すべし但し頭を除き塗べし仔の生るゝや其初め皆盲目にて一週間乃至二週間にして目開くこれは豆腐のからを水にて和らに

練乳又ハ柔かな芹等を與ふべし而して廿五六日を限り離乳せーとき別函ヨ移ー又ハ放飼場ヨ出すべし

疾病及治療法

兎の治療法左の如き

下痢

其輕な症ある時ハ樫の葉を與ふると半日乃至二日にて癒も重症なるヨハ葛の根を煎じ食草ヨ混し與ふ又燒明礬を與ふるも可あり又此の症傳染するものなれハ病兎ハ別函ヨ移す清潔ヨ為置べー

眼症

清水を以て屢々洗ふへし若癒されハ龍腦を水に溶解ー洗ふべし

鼻の症

鮑貝の殼を燒き粉ヨし菜種油又ハ「クリスリン」を練り塗るべき

涎の症

此症ハ常に多きものヨて其時ハ一夜乃至二三夜も屋外ヨて夜露に晒すべー忽ち癒るものなり又燒明礬四分水三十滴に溶かー口鼻に塗り其殘余を飲まーむべー

腸熱病

此病に罹りたるときハ腫脹れて他と痛るものあり宜く青草の水分多きものを撰て與ふべし又水を飲まむるもよろし

又望江南決明等を與ふるも効あり

凡て兎と其病の初發に當り夜露よりのがれしむれと大概ハ癒るものなり又一ケ月に一二回つゝ夜露に逢ハしむれバ病に罹ると少し

割部調理及鑵詰法

兎を屠殺して食用ふ供せんとするにと先一週間程も乾草を與へ而して后黍類小麥玉蜀黍等を與へ二日間程飼育して屠るへし然るときハ其肉最も美なる風味を生ずるものなり屠殺にハ先前肢の後方ふ左の手を入れ肺及心臓を絞め右の手にて后肢を束ね後に引く氣味にて暫くすれと死するものゝ而して皮を剝ぎ肉を取りて食用とす皮と肉付の方を表ふし板の上ふ置き四脚頭尾とも釘を打ち方形とす明礬と卵の蛋白とを混和せしものを塗り日光に晒し後函ふ詰め章腦を散布して貯ふべし肉と屠殺の後數時間乃至一日を置き食しれハ香味を増し咀むと易く且消化し易し其食法ハ凡て牛肉に於るか如く又是を鑵詰とするにハ生肉を十二三匁位の大さに切り一斤入の鑵に詰め適宜鹽水を入れ「ハンダ」にて密閉し熱湯ふ投じ猛火を以て凡三十分間も沸騰せしめ而して引上け放冷せしむるなり兎

性快速ふして常ふ奔走ゑ其体中の炭表を消耗ゑ脂肪肉甚た稀ふして食物中最も滋養多き小獣ゟり其分折表を左の如し

水	七三、一七	蛋白質	二〇、九一
脂肪	三、一五	亞兒箇保兒	一、五五
ユキス乃吟出	一、五四	ユキス	一、二三
合計	一〇〇、〇〇		

附言、

牛肉其他現今我國に於て多く食用ふ供せらるゝ諸肪性分の比較を舉くれば左の如し

	含窒表物	脂肪	不含窒表物	鹽
牡牛	六八、二〇	一九、六三	一一、〇三	一、一五
牝牛	七三、七〇	二〇、三五	四、七五	一、二〇
犢	七五、五一	一九、四七	四、一二	九一
羊	六一、八八	一五、九五	二一、〇八	一、〇九
豕	五九、七九	一七、二三	二三、〇六	九一
鹿	七五、七六	一九、七七	一、九二	一、四三
雄雞	七六、三二	一九、七二	一、四二	一、二七
雌雞	七六、〇三	三一、三二	二、三三	一、一五
雌兎	七四、一六	二三、二四	二三、二四	一、一三

明治廿五年十月十五日印刷
仝年　仝月二十日　出版
發行兼印刷人　山形縣西村山郡寒河江村　田村貢
（定價金四錢）